

雑木を植えてみなっせ

有限会社新明館 代表取締役
観光カリスマ

後藤 哲也



今から25年ほど前、京都を訪れる観光客の流れが日本庭園から自然の景観が残るお寺へと変化し始めたことに気づいた後藤哲也氏は、その後の地域づくりの鍵を「ストレス」と見通し、以来「癒し」をテーマに黒川の地域づくりを行ってきた。露天風呂、雑木の植樹、入湯手形と、黒川温泉を牽引し続ける「癒しの観光カリスマ」に、今回は登場していただいた。

癒しの世界

現代人は競争とか、いろいろな事で悩んでるでしょ。仕事する上においても悩みがある。友達同士でも、付き合いとか、いろいろあるんで、皆ストレスが溜る。悩んでいると、自分がその悩みを取るためには、癒しの世界を創らな取れんわけよ。癒しの世界というのはどういうものかというところになったら、その地域の気持ちのいいところ、気持ちのいいところを、人は求めて自分の精神の安定を図る。

黒川温泉の建物は、僕が最初に黒く塗った。なぜ黒く塗ったかというと、僕たちが

子供の時は、暖房とか何とか、みな焚き物で火を燃やした。家がみな、柱でん何でん黒かった。それで、ふるさとを創ろうということでも黒く塗ってしもうた。それは黒色じゃなくて、すすけた色に塗ったということ。そして、癒しの世界を創ろうということですよ。

景色より雰囲気

温泉でもどういうふうに変わってきたかというところ、今は景色のいいところほど、山の上の温泉ほどいいかん。わかりますか。山の上から景色を眺める、昔はそれが良かった。



た。今はぜんぜんいいかん。それは何で受けんかというようなことになる——気持ちいい温泉にいかないといかん、これが今の人が求める世界。景色よりも温泉のよさ



が大切。

今、日本中で賑わわんとはどこかという、海端とか景色のいいホテルとか店とかが賑わわん。湖の近所とかがほとんど賑わわん。なぜかという、日本人は、今日はここに泊まって精神的にゆつくりしようというときは、眺めが良かったらいかんわけ。最初からゆつくりなるようなことを求めて行く。だから、景色やない、雰囲気だということ。また、食事する場も海岸の反対側にあるところが賑わったりします。それは、駐車場からは海が見えたつちや、いいわけよ。でも食事のときは、あんまり見え見えにさせちゃいかんよということ。食事に集中していいこうと。蕎麦屋さんなら蕎麦屋さんの雰囲気、焼肉屋さんなら焼肉屋さんの雰囲気、その雰囲気、あんまり景色は見せんごととせんと。ほんとに自分が景色見て味も何もわからんで

は、二度とそこへは行きたくない。いかに雰囲気で勝負するか、それがやっぱ癒しの世界のひとつですよ。黒川温泉もそう。それで賑わいがある。

今の人は昼間は観光地を廻つても、夜はゆつくりなるようなところに泊まる。温泉地は温泉地でいかさんといかん。観光地でいかしてはダメですよ。温泉は、昔は健康の世界だったです。今は、癒しの世界だということ、答えは。

別館の「山みず木」は僕が造ったところですよ、全部。樹も僕が植えて。そして、本当はそこから九重山も見えるわけ。でも、樹を植えて、旅館の玄関から中に行くと全然九重山が見えんようにしてある。それはなぜかという、それが癒しの世界。ものすく、ゆつくりなるような世界を創ってやつとる。「山みず木」からは遠くの景色は見えんでしょ。あの周辺の景色で固めとるでしょ。その周辺で、気持ちがあり外へいかなような感じ。その方が人気がいいですよ。他所には、景色は日本一ゆうような風呂がありますが、もう今は、そういう時代じゃないですな。

京都のまね

近所の甘味処、緋毛氈敷いちよったから

「合わん」と店の奥さんに言うとききました。お客さんに対してここは何を提供するかになったら、ここは京都じゃないですよ。僕が若いときは、もう毎年京都に行つて、帰つたら京都のまねをしていた。今は、お客さんは京都へは皆行つとるから、ここは京都のまねをしちやるなとわかる。それではいかん。そうでしょう。それじゃ、本当に黒川温泉、この地域の良さというものは出らん。そこは、地域地域で何するかということじゃないですか。

お客さんが、ここで写真撮りよる。前を通る人が、この旅館見て「わあ、これはすごいね」と言う。すごいねと言うのは、日本の文化やふるりの雰囲気や地域性が出ているからでしょ。鉄筋の20階建てのビルがここにあつても、今の人は、すごいねとは言わんわけよ。すごいねと言わせるとは何かを考えないかん。ちよつとしたところですよ、すごいねと言う。

普通の民家でもそう、まちづくりでもそう、その文化、そこは昔どうなっていたか、そういうようなことで解決していったほうが、どこでもある同じようなもの造るよりも。また、その場所で最高なことは何かというようなことをしていけば、いいわけです。それは、和の文化でしょう。

雑木を植える

いつでも気持ちのいい町を造るために、今から先はどうせねばいかんかというのと、雑木を持ってきて町の中に植えることです。そうすれば素朴な世界ができます。癒しの世界を創るときには、これが一番早いのです。

そして、雑木でも1本植えはしないで、林のごとバツと植えたり、2、3本植えたりして、雰囲気を見てください。全体の半分の雰囲気ができるでしょ。

今の人は、もう、剪定された庭木では癒されんとです。だから、日本人は今、おしゃれな店にしようというときに、剪定した木を植えて寿司屋したら、全然お客さんは来ないですよ。おしゃれな店に見らんわけです。



だから、街並みも、おしゃれな店に見えるとは何かというところ、自然の樹を植えて、そういうようなおしゃれな店をつくらないかん。家と樹が

半々ぐらいですよ、人を呼ぶものが。家が半分、樹が半分。樹を植えてないのは半分しかならん。樹を植えて、残りの半分ができるということ。

雑木も自然な感じで植えていくと、四季の変化があるでしょ。松じゃ四季の変化がないですよ。だから、松をきれいにするよりも四季の変化を与えたほうが、皆感動する。松は四季の変化がない。そして手が要るでしょ、金がかかるでしょ。

黒川は全部、雑木を植えたんですよ。温泉街の上の道路、旅館組合やらあすこら辺もずうっと、みな植えた。全然、植えた感じがせんで、昔からあった感じがするでしょう。そこら辺もなにも自然の樹を全部植えた。以前は庭木だったが、旅館組合の周りも植え替えてしもうた。植えられるところはみな植えたました。雑木には地



町のいたるところに雑木が植えられている

域性があるし、紅葉もするし、四季の変化もあるし。

「山みず木」の樹は、全部僕が植えた。元々は田んぼだった。今の家や露天風呂があるところは、みな樹を植えたんです。樹を植えるとき、今は支配人をしとる弟が、「兄貴、何でもこげな樹の植え方するか。」と聞くから、「上ん山見てください。山のように植えんと、ここに自然が繋がらんよ。」と言った。妙な植え方したら、全然、山と切れてしまふもんだから。山と繋がらないかんから、ああいう植え方をしとるわけですな。

庭師の人は、お客さんの気持ちになりきらん。僕たちは、絶えずお客さんの気持ちになつて植えてきました。だから、人が求める庭の変わりようもわかった。癒しの世界を創りきる、樹で。お客さんが見たときは、もう、昔はここは山じゃつたらうな、その樹を切つて家を作つたような、そういう姿に。それが最高の庭。そうすると一年中見ても飽きません。毎日見たつちや魅力がある庭を造る。そんな庭を造りきらんと、今はもういかん。

まちづくりでもそう、気持ちのいい世界を提供せねば、どうしたつて気持ちのいい町づくりはできません。